

# 内モンゴルの学校における民族文化教育についての考察

## —オルドス市ウーシン旗のモンゴル民族学校を事例に—

李 叶

### Abstract

Based on the new curriculum reform and the related policies of ethnic folk culture into the school, this paper examines the current situation of ethnic culture education of Mongolian schools in Wushen County, Inner Mongolia Autonomous Region, which has a strong nomadic culture. The survey focused on the school curriculum, extracurricular activities, and other national cultural activities. Interviews with teachers, students, and parents of the school revealed that local schools educated students in a variety of ways. In the context of the current grave loss of national culture, the educational activities related to these ethnic cultures held in schools play an instructive role model for the protection, maintenance, inheritance and revival of traditional Mongolian culture. However, it is necessary to acquire the required time for the school curriculum when the school runs through the national culture education. In addition, it is necessary to improve the national cultural quality of the teachers and cultivate the talents needed for the national education.

キーワード……内モンゴル 学校 民族文化教育 モンゴル民族

### はじめに

本稿では、中国の素質教育と新課程改革と民族文化採用政策を基に、内モンゴル自治区（以下内モンゴルと略）で伝統的遊牧生活が比較的長く維持された地域におけるモンゴル民族学校の民族文化教育の実態を考察する。

1999年6月13日に共産党中央委員会と国務院は「教育改革を深化させ素質教育を全面的に推進することに関する決定」を通達し、知識伝達を偏重する教育から人間の徳育、知育、美育、体育方面の様々な能力を活かしながら、その人の様々な素質レベルを高めることを目指す素質教育を全面的に実施し始めた。また、国家課程（国家规定の課程）、地方課程（地域独自の課程）、学校課程（学校独自の課程）の並存という教育課程の多層化と多様化の目標が初めて確認された。こうした素質教育の実施により、学校では徳育、美育、体育教科がさらに重視されるようになった。特に、少数民族地域では地域の実情に合わせて学校の音楽、美術、体育教科と関連付けて民族の伝統的芸術を教える民族特色興味クラス（以下興味クラスと略）の設置と民族文化活動を展開するなど、学校教育に民族文化を採用することが進められた。さらに、2001年6

月7日に国家教育部は「基礎教育の課程改革の綱要（試行）」（以下「綱要」と略）を発表し、新課程の実験やそれへの移行に対する号令を発した。主に、これまでの国家統一課程管理を国家、地方、学校の三級課程管理へと変えて全国的に新課程改革が始まった。「綱要」は、学校では国家課程を実施するほかに地方課程と学校課程を実施することを認め、地域の特色と民族文化を活かして児童生徒に適切な課程を開講することを強調した。それまでは、少数民族学校で使用する教材は少数民族母語教科を除き、他の科目教材が全国統一の中国語の教材を民族語に翻訳したものであった。教科書は漢民族文化を中心に教え、少数民族の文化と歴史についての教育内容が欠けていた。こうした少数民族学校の課程における民族文化が伝えられない実情に合わせ、地方課程と学校課程及び課外活動などを通して、地方文化と民族文化を児童生徒に教えることは少数民族文化の伝承にとって有意義なことと思われる。

本稿は上述の教育政策を背景とし、内モンゴル自治区オルドス市ウーシン旗におけるモンゴル民族の幼稚園、小学校、初級中学校（以下初中と略、日本の中学校に当たる）、高級中学校（以下高中と略、日本の高等学校に当たる）の学校課程、課外活動及びそれ以外の民族文化活動に焦点を当てて、教師と生徒と保護者へのインタビューを通して学校における民族文化教育の実態を明らかにする。さらに、中国の民族教育政策は少数民族文化を保護し、伝承することによってどのような影響を与えるのかを実証的に検討する。

## 1 先行研究と問題点

ここで内モンゴルの民族教育に関する先行研究を整理し、本稿の位置づけを提示する。

ハス額尔敦（2005）、ハスバートル（2010）、崔劍・鮑曉艷ら（2012）、賽漢花（2017）、麗麗（2018）は教育優遇政策により、内モンゴル地域では民族学校の各段階においてモンゴル民族学生数と教師数、就学率が上昇し、教育を受ける機会が与えられたと指摘した。また、学校統廃合制度と寄宿制度により、子どもたちは就学するために、従来の民族文化生活圏から脱離され、民族言語と文化教育を受ける機会をなくし、学校側は校舎建設と管理に追われて財政困難に陥り、家庭においては経済負担が増えただけでなく、家事が放置され、親子の交流が減り、家庭教育にも影響を及ぼしていると指摘した。

ハスゲレル（2004 2005）、スチングワ（2007）、烏力更（2013）はモンゴル民族学校の教科書を分析し、民族の歴史と文化の内容が少なく、記述が不十分であると指摘した。さらに、モンゴル民族の子どもたちが日常的に身につけた文化と教科書の内容が大きく離れ、社会主義中華民族を主張する教育理念の下で民族アイデンティティを作り出すことは困難となっていると論じた。

ハ斯巴ガン（2000）は清朝時代のモンゴル民族教育と言語教育を論じ、哈申格日勒・小柳（2007）と崔淑芬（2011）は二言語教育が民族言語に与える影響について論じた。イリチ（2012）、ブヘ（2015）、ボルジギン・ムンクバト（2013 2014 2015）、アルタンホァール（2016 2017）は

モンゴル語使用について研究している。

学校における民族文化教育について劉偉・李洪梅（2016）は内モンゴルの民族伝統文化の伝承に直面する問題を取りあげ、民族文化を伝承し、保護する方策を分析した。アラ塔（2016）はアラ善地域の民族教育の現状を調査し、民族教育が民族アイデンティティの形成と民族文化の伝承に大きな影響を与えると述べた。内モンゴルの農耕生活文化に同化しつつある地域のモンゴル民族学校における民族文化の伝承については、関健・張艶華（2016）、韓天嬌（2017）、李叶（2018）の研究がある。関・張らは赤峰市民族学校での調査を通して、教師の民族文化価値観を高めることと地方課程と学校課程の開発を提言した。韓は通遼市小中学校の学校課程の実施状況を分析し、学校の管理者と教師は学校課程について正しく認識していないこと、課程内容は単一であること、教育経費と教師が不足していることを明らかにした。筆者は李叶（2018）により、農耕地区である通遼市フレイ（庫倫）旗の学校における地方課程、学校課程と課外活動を中心に民族文化教育の現状及び問題点を考察した。その考察の結果、「新課程改革と民族文化採用政策によってフレイ旗の学校では、民族文化にかかわる教科と課外活動において民族文化を重視し始めた。しかし1) 教師と生徒の民族文化知識のレベルが低い。2) 興味クラスで教える民族文化についての教学内容が単一であり、専任教師と教学設備が不足している。3) 地方課程の教学方法は学校ごとに異なっている。4) 学校課程教材が未開発である。5) 教育経費が不足している」ことを明らかにした。

これまでの先行研究では問題点が2点ある。1点目は、研究対象が教育優遇制度、学校統廃合制度、寄宿制度、二言語教育による民族教育への影響、教科書の分析、モンゴル語の使用状況に偏っていることである。2点目は、素質教育と新課程改革と民族文化採用政策による民族教育の変化に関する研究がそれほど進んでないことである。

本稿では、内モンゴルにおけるモンゴル民族の生活方式と民族文化の現状が農耕地区と牧畜地区（以下牧区と略）によって大きく異なることを想定し、先行研究を踏まえながら、ウーシン旗を牧区として捉えてウーシン旗のモンゴル民族学校における民族文化教育の実態を明らかにする。

## 2 調査概要

### 2.1 調査対象者・内容・方法

2019年1月3日から15日にかけてウーシン旗のモンゴル民族学校を代表する幼稚園、小学校、初中、高中を一か所ずつ選んで調査を行った。各学校の学校課程の教材編集に参加した教師、音楽と美術と体育の担当教師、民族文化教育活動に取り組んでいる教師にインタビューした。また、クラスの担任教師から児童生徒代表者及び保護者を紹介してもらい、インタビューし、教育現場を観察した。保護者に対し、子どもの送迎時間を利用してインタビューした。インタビュー調査には、幼稚園から教員6人と園児2人と保護者1人、小学校から教員5人と生

徒 2 人と保護者 4 人、初中から教員 4 人と生徒 2 人、高中から教師 4 人と生徒 2 人と保護者 1 人が応じてくれた。調査は各学校の学校課程と課外活動、それ以外の民族文化活動に焦点を当て、それらの内容、方法、特徴、問題点を考察した。調査では各学校の興味クラスとラジオ体操の現場を観察できた。しかし、入学式と運動会と祝日祭祀に行う民族文化活動の現場を観察することができなかつたため、担当教員からそれらの活動についてのビデオを見せてもらい、ビデオを見ながら教師から活動の実情について詳細にインタビューし、記録し、関連する資料を入手できた。なお、補助調査として電話調査を行った。

## 2.2 調査地の概要

本研究の対象とする具体的地域及び学校について簡単に説明しておくことにする。調査地は内モンゴル自治区オルドス市ウーシン旗であり、調査は A 幼稚園と B 小学校と C 中学校で実施し、いずれもモンゴル語で授業を行っているモンゴル民族学校である。

ウーシン旗は内モンゴル自治区オルドス市西南部に位置し、北はイジンホロー旗、ハンギン旗と接し、東と南は万里の長城と陝西省と隣接し、西はオトク旗とオトク前旗と接している。総面積は 11,645 平方キロメートルであり、5 つの鎮と 1 つのソムを管轄している。2018 年の旗内総人口は 13.2 万人で、そのうち農村と牧区に 6.3 万人が住み、残りの 6.9 万人は町に住んでいる。漢民族は 70.9% を占め、主に旗の中心部に住む。モンゴル民族は約 3 万人で 22.5% を占め、多くは牧区に住み、ほかの少数民族人口は 6.6% を占める。産業別就業人口の比率は第一次産業が 3.9%、第二次産業が 70.6%、第三次産業が 25.5% である。境域内において天然ガスと石炭、水資源などの自然資源が豊富であり、2017 年 12 月に「中国工業 100 強県」75 位に選ばれ、「西部 100 強県」において 7 位となり、経済的に豊かな地域である。当旗は「中国スウルデ文化の故郷」、「中国オボーリ文化の故郷」、「中国オルドス歌舞の故郷」、「中国民間文化芸術の故郷」と称されている<sup>2)</sup>。

A 幼稚園（以下幼稚園と略）は 1981 年に建設され、校地面積は 24,800 平方メートルであり、校舎面積は 11,176 平方メートルである。教職員は 119 人、園児は小班（3 歳～4 歳未満）・中班（4 歳～5 歳未満）・大班（5 歳～6 歳）の 3 つの学年レベルに分けられ、全部合わせて 22 班（班は日本のクラスに当たる）から成り、846 人いる。

B 小学校（以下小学校と略）は 1950 年に建設され、校地面積は 46,662 平方メートルであり、校舎面積は 21,483 平方メートルである。教職員は 162 人、41 班があり、在校生は 1,294 人いる。

C 完全制中学校（以下中学校と略）は 1976 年に建設され、初中課程と高中課程が併設されている学校である。校地面積は 60,000 平方メートルあまりで、校舎面積は 59,328 平方メートルである。教職員は 160 人、初中は 20 班があり、生徒は 606 人いる。高中は 15 班があり、生徒は 395 人いる。

### 3 学校課程

学校課程教材（以下教材と略）は、国家の三級課程管理体系の重要な構成部分であり、生徒に地方文化、民族文化を教学できる教材でもある。2014年4月21日にオルドス市教育局は、国家教育部の「基礎教育課程改革綱要（試用）」の要求と市の実情に合わせて「オルドス市小学校学校課程開発及び実施を指導する意見」を発行し、学校課程の開発と実施にかかわる指導思想、原則、実施方案を明確に定めた。こうした政策によって各学校では学校課程の教材が出来上がった。幼稚園と小学校では学校課程の授業が始まっているが、中学校では学校課程がまだ開発されていない。調査では各学校の教材開発に参加した責任者を対象にして教材の開発経緯、教材の内容、実施状況を中心にインタビューした。

#### 3.1 教材の開発経緯と内容

##### 3.1.1 幼稚園の教材

幼稚園は民族伝統文化教育と礼儀教育を教学特色としているため、毎学期クラスの担任教師の間で地方と民族文化をテーマにして授業参観を行う。こうした授業参観の資料を精選し、2017年に『バヤスガラント・バガナス』（Bayasgalantg бага нас、楽しい子ども時代という意味）、『ノムタイ・フヘド』（Nomtai huuhed、本を好きな子どもという意味）と『ミノ・ノタグ』（Mino nutag、私のふるさとという意味）という3冊の教材を作成した。教材は各班の担任教師だけに配布され、毎週の月、水、金曜日（10:20～10:50）の主題活動という科目で教えられている。

『バヤスガラント・バガナス』（全203頁、61課）は小班向けの教材であり、「私」を中心に内容が構成され、体、家族、幼稚園、興味、春と夏の楽しみといった身近なことを含む。その中で、民族伝統的子どもの遊び、民族伝統飲食物、仔家畜と家畜の糞の呼び方及び利用についての内容は16.3%（10課）を占める。『ノムタイ・フヘド』（全228頁、50課）は中班向けの教材であり、四季を中心に、よく見かける動植物の特徴、変化と利用、オルドス地域の民族伝統習俗と図書館などを紹介している。その中で、モンゴル民族の伝統的食べ物であるモンゴル・アム、ラクダ、牛、馬、羊、ヤギを含む五畜と仔家畜の呼び方及び利用についての内容は34.0%（17課）を占める。『ミノ・ノタグ』（全197頁、54課）は大班向けの教材であり、四季を中心に、故郷の動植物の種類と生態について書かれている。その中で、チャガンイデゲ（乳製品）、小麦粉の皮で牛肉と羊肉を包んだ蒸し饅頭であるモンゴル・ポーズの作り方、五畜の特徴と出産と経済利益、競馬、ブフ（モンゴル相撲）、弓術、家畜についての内容は42.5%（23課）を占める。幼稚園の学校課程教材における民族文化知識についての教育内容は学年レベルが高くなればなるほど、深化し、増える傾向がある。

##### 3.1.2 小学校の教材

小学校では、2018年11月に『ノタグ・オハンⅠ・Ⅱ・Ⅲ』（Nutag uhaan、草原の知恵という意

内モンゴルの学校における民族文化教育についての考察（李叶）

味）という民族習俗を中心とした教材が作成された。その内容は表 1、表 2、表 3 の通りである。

表 1 『ノタグ・オハンⅠ』（全 216 頁）の内容構成

対象学年	1年生～2年生
伝統的習俗	客の送迎礼儀、挨拶礼儀、ハダグ(帯状の絹布)とフフル(かぎたばこの瓶)の交換方法、尊敬礼儀
伝統的遊び	子羊のしっぽをつかむ、手の影で動物などを作る、網ゲーム、ハンガチ落とし、競馬する
五畜文化	馬、牛、駱駝、羊、ヤギの紹介、遊牧生活の知恵
伝統的飲食物	チャガンイデゲ(乳製品) オランイデゲ(肉料理)、ボルイデゲ(米、小麦粉で作った料理)、ミルクティー
伝統的道具	モンゴル・ゲルの由来及び禁忌習俗、ごみ捨てにかかわる習俗
母語・文化	早口言葉、謎掛け、物語、モンゴル模様
オルドス民謡・舞踊	オルドス民謡4曲、オルドス舞踊、頂碗舞、筷子舞など六つの民族舞踊
ふるさとの動植物	故郷の草と木、哺乳類、鳥類、自然生態の知恵

(出所)『ノタグ・オハンⅠ』を参考し、筆者が作成した。

表 2 『ノタグ・オハンⅡ』（全 270 頁）の内容構成

対象学年	3年生～4年生
伝統的習俗	火を祀る習俗、ビトゥーン(大晦日)、ツァガンサル(お正月)、七つのほどけ様を祭る、ハダグを差し上げる、禁忌習俗
伝統的遊び	モンゴル将棋、シャガー(羊の後ろ足のくるぶしの骨)、鬼ごっこ、ピラグ(狩猟、放牧用の道具) 投げる
五畜文化	五畜の模様名称、歯、年齢、出産
伝統的飲食物	牛乳を搾る礼儀、チャガンイデゲの作り方、飲み物を大切にする習俗、ミルクティーの種類と作り方と禁忌習俗
伝統的道具	伝統的家具、チャガンイデゲの道具、農耕作業用の道具
母語・文化	ことわざ、物事の本質と真実を議論し合う、早口言葉、モンゴルの叙事詩『ジャンガル』、動物と子動物の名称
オルドス民謡・祝詞	民謡3曲、五畜とシャガーと羊の丸焼きのユルール(祝詞)、ハダグとモンゴル・ゲルの礼賛
ふるさとの地名特徴	家畜の小屋を作る知恵、ふるさとの地名と特徴、チンギス・ハーンのお墓、万里の長城、ブリヤ砂漠など

(出所)『ノタグ・オハンⅡ』を参考し、筆者が作成した。

表 3 『ノタグ・オハンⅢ』（全 272 頁）の内容構成

対象学年	5年生～6年生
伝統的習俗	スウルデの種類、オボートヒ・モリ祀り、自然環境を保護する習俗と知識、モンゴル族の由来と親族の呼び方、しつけ方
伝統的遊び	男子三大競技、プフ(モンゴル相撲)、オルドスプフ、プフの名称、64シルゲ、鹿シルゲ
五畜文化	五畜の利用と呼び方、家畜を飼育する知恵
伝統的飲食物	オランイデゲの作り方と食べ方と飲食習俗、ボルイデゲとフフイデゲ(野菜類の料理)の種類と名称、作り方
伝統的道具	オルドス地域の民族衣装の特徴と着り方、男女別の装飾品、五畜に使う道具
母語・文化	うまく議論する言葉遣い、ゲサル・ハーンの物語、彫刻、刺繍、剪紙などの手工芸
オルドス民謡・舞踊	民謡2曲、馬頭琴、笛、揚琴、箏などの民族伝統的楽器
伝統的民族歴史文化	チンギス・ハーンの世界史と文化と陵墓の祭祀、モンゴル族の歴史上の有名な政治家、オルドス地域の有名人

(出所)『ノタグ・オハンⅢ』を参考し、筆者が作成した。

教材は社会的に好評であったため、オルドス地域のすべてのモンゴル民族小学校の生徒に配布され、学校課程の教材として使用されている。各学校では学年ごとに教師を一人配置し、各班に週一回教えている。教材の編集者の話によると、教材を編纂するために自分自身の生活経験と知識を活かすほか、オルドス地域の民族文化習俗についての重要な資料と本を参考にし、さらに民族文化習俗に詳しい専門家と高齢者に聞き取り調査を行い、子どもの年齢と成長に適した内容を取り入れたという。教材の内容は民族伝統習俗、民族伝統体育と遊び、五畜、民族伝統飲食物、民族伝統家具と道具、言語と文化、オルドス地方の民謡、舞踊、楽器、民族歴史といった 8 つの部分から構成されている。

### 3.1.3 中学校の教材

2018 年 12 月に民族文化工作室の教師らは協力して 4 冊の教材を作成した。『三弦』(全 84

頁)、『四線ホール』(全72頁)、『馬頭琴』(全63頁)を興味クラスの授業に使っている。『母校』(全103頁)はオルドス地域の歴史文化についての資料を基に編纂されたものであり、すべての生徒を対象とするが、教えられてない。教材内容はオルドス市及びウーシン旗の歴史、オルドス地域モンゴル民族伝統習俗、歴史上のモンゴル皇帝と教訓という三つの項目から構成される。幼稚園と小学校の教材内容と比較してみると、お正月礼儀とスウルデ<sup>3)</sup>祭祀とユルール(祝詞)についての記述は重複しているが、中学校の教材のほうが特にオルドス地域とウーシン旗の歴史、婚礼習俗、葬儀習俗、年祝いについて詳細に書かれている。

調査対象校の教材の開発経緯と内容には以下のような特徴がみられる。1)各学校では、教師は先導し、計画し、教材を作っている。2)すべての教材には生徒の年齢と心身発達に適する地方文化、民族の歴史及び文化習俗についての知識を取り入れている。

### 3.2 学校課程の実施状況

調査では、教師から学校課程を教える必要性、学校課程の実施にかかわる問題点についてインタビューした。各学校の教師一名ずつに学校課程を教える必要があるかどうかを聞いた。学校を問わずにすべての教師は学校課程が生徒にとって民族文化を理解し、伝承するのに欠かせない課程であり、教える必要があると主張している。

学校課程を実施するに当たっては、学校それぞれの問題があることが分かった。その中でも、中学校の教師の話によると、問題点の一つは学校課程が各類試験に出題されないことであり、もう一つは、授業時数が取れないことから、まだ学校課程を開講できてないということであった。また、小学校では教師の民族文化知識のレベルが低いことが、学校課程の実施に支障を与えていることが明らかになった。なお、小学校の教師への聞き取り結果は以下の通りである。

「本校では民族伝統的生活をほとんど経験しなかった民族文化知識レベルが低い若い教師が学校課程を担当することが多い。教師自身は民族文化知識が希薄であり、民族文化習俗についての内容を現実と合わせて、生き生きと解説できない。学校では教学経験と民族文化知識のレベルが高い教師はいるが、その教師らは主要課程を担当している。」(女性、50代、小学校教師)

## 4 課外活動

調査対象校では課外活動時間を利用し、興味クラスを設置し、民族の伝統的芸術を盛んに教えている。本章では、現地調査に基づいて各学校の興味クラスの配置、教学内容、教学方式を概観する。さらに教師、生徒と保護者のインタビューを通して興味クラスの実施状況を分析する。

### 4.1 興味クラスの実施状況

各学校では興味クラスを設置し、現代芸術と体育だけでなく、民族伝統芸術と体育、習俗などを含む様々な項目を教えている。各学校の音楽、美術、体育、モンゴル語の教科科目の教師がそれぞれ関連する興味クラスの授業を担当している。

幼稚園は2013年から音楽、舞踊、美術、体育の興味クラスを設置し、それぞれ一人の専任教師が担当する。各興味クラスは狭く、教師が少ないため小班の園児を除き、中班と大班の各クラスから4、5人が参加できる。中班は毎週火曜日と木曜日、大班は毎週月、水曜、金曜日に開講する。音楽教室ではモンゴル語の子どもの歌、オルドス民歌と四線ホール、馬頭琴を教える。そのほかに、鼓、ピアノ、ギターなどの現代楽器の演奏についても教える。美術教室ではふるさとの風景を描くほかに、民族伝統的模様、フェルト（毛氈）芸術、剪画、刺繍を教える。体育の授業を利用して男女を問わず園児全員にブフを教えている。

小学校は、2012年から興味クラスの授業に必要な民族楽器と教学道具を揃え、興味クラスの授業を始めた。各種活動は個別の活動教室を確保し、専任教師を配置し、教学計画の通りに実施される。生徒数が多いため、活動室の場所と教学器具、楽器などを学年ごと分け、交替で使う。毎週火曜日（15:30～17:00）に1年生～3年生を対象に行い、木曜日（15:30～17:00）に4年生～6年生を対象に行う。民族歌、民族舞踊、馬頭琴、四線ホール、揚琴を教える「音楽室」、刺繍と毛筆字と剪紙（切紙細工）を教える「絵画、手工芸室」、ブフと弓術、ビラグ（Biluu、狩猟、放牧用の道具）、モンゴル将棋とシャガー遊び<sup>4)</sup>を教える「民族伝統体育、遊び室」、モンゴル毛筆字、朗読、作文、司会術と民族伝統習俗を教える「言語文化室」、飛行機の模型を作ることを中心に、そのほか小学生の年齢に適合した科学知識と実験をする「科学技術活動室」という5つの活動室がある。

中学校では初中生と高中生に対して別々に興味クラスを開講し、専任教師を一人ずつ配置し、教室を一部屋ずつ用意し、授業は教学計画の通りに実施している。すべての学生に対し、陸上運動、ボール（バスケットボール、バレーボール、サッカー）教室を開講しただけでなく、民族伝統体育（ブフ、モンゴル将棋、弓術、けばね）、民族楽器（四線ホール、馬頭琴、三弦）、民族芸術・文字（民族舞踊、民族歌、絵画、毛筆字、司会術、刺繍、かご編み）など15種類を毎週火、木、金曜日（16:20～18:20）に教えている。それに高中生に対し、興味クラスだけでなく、一学年に特長班（一芸入学者クラス）を一つ設置してある。特長班では、高中進学者の中から絵画、音楽、陸上運動、司会術、四線ホール、揚琴が得意な生徒を募集し、試験に受かった者に対して専門的指導を行う。特長班では普通教科科目を勉強する以外にそれぞれの選んだ項目を専攻として勉強し、大学進学試験を受験する生徒が多いが、ただ興味として学ぶ生徒もいる。

#### 4.2 教師に対するインタビュー

興味クラスの教学実態を把握するために、幼稚園から4名、小学校から3名、中学校から4名の教師にインタビューした。興味クラスの担当教師から教学内容、教学方法、教学目的、生



徒の学習態度、教学面での改善すべきところについて質問してみた。主なインタビューの結果は以下の通りである。

「子どもの年齢と体の発達に適した舞踊難易度を配慮して、中班の園児に踊りやすい子どもの舞踊を中心に、大班に舞踊の難易度が高い民族舞踊である積み重ねた碗を頭に乘せて演じる「頂碗舞」、箸を道具として使って踊る「筷子舞」を教えている。民族舞踊を教えることを通して、園児が民族舞踊の知識、技能と優雅さを把握できるし、民族舞踊に興味を持ってもらいたい。開講したばかりの時に10人しかいなかったが、現在100人もいる。毎年の参加希望者が募集人数よりも多い。」(女性、20代、幼稚園教師)

さらに、興味クラスを開講する前後の民族文化教育についての工夫、興味クラスの専任教師と教学道具の配置状況、教師らの態度を尋ねた。

「以前、音楽の授業では民族歌を教えて、美術の授業では草原の風景家畜などを描くなど以外には民族文化についてあまり教えていなかった。2012年から、生徒たちに民族伝統体育と芸術などを幅広く教えるようになった。活動にはすべての生徒が参加できるし、民族文化と接して、勉強できるよい環境を備えている。活動室の教師は特に足りないことはないが、活動室の専任教師が不在の場合、専任教師ではなく、それらの活動に得意な教師が一時担当する場合がある。」(女性、40代、小学校教師)

「国家が民族文化を重視するようになって、民族学校では民族伝統体育芸術にかかわる民族文化を多く教えるようになった。学校はすべての生徒を対象にして興味クラスを設置しているが、中学段階から生徒の学習成績が最も評価されることから、生徒は主要課程の勉強に集中して、興味クラスにあまり参加しない。参加する生徒はみんなまじめにやっている。今後とも民族伝統体育と芸術を宣伝して、多くの生徒に参加してもらいたい。」(女性、30代、中学校教師)

教師に対するインタビューから、興味クラスのさまざまな活動を通して生徒の民族文化に対する興味を引き起こし、民族文化を知ってもらうということが活動目的であることが分かった。興味クラスの授業は各学校の管理のもとで計画的に実施されている。しかし、興味クラスの実施において幼稚園では教室が狭いから参加する生徒数が制限されている。小学校ではすべての生徒は参加できるが、専任教師が不足している。中学校では教室と教師を確保できているが、生徒が主要科目の勉強に集中し、参加する生徒が少ないという問題があることがわかった。

#### 4.3 生徒に対するインタビュー

生徒から興味クラスに入っているかどうか、その要因、興味クラスで学んだものを身に付けるための日常的取り組み方法を尋ねた。インタビューに各学校から生徒2名ずつ応じてくれたが、ここでは2名のインタビュー内容をとりあげる。インタビューの結果は以下の通りである。

「初中1年生の時から学校の馬頭琴教室に入った。民族楽器の中で馬頭琴が一番好きで、小学生の時からずっと練習しようと思っていた。馬頭琴を専攻として大学に入る予定はないが、ただ興味でやっている。馬頭琴教室に入ったからといって、他の授業科目の勉強には圧力とならない。馬頭琴を演奏することで、心が広がって癒されるので、これからも馬頭琴練習を続ける。」（女性、15歳、初中生徒）

「来年の大学進学試験に向けて、全力で勉強しているから興味クラスに入っていない。内モンゴル大学の法律系に進学して、将来弁護士になりたい。競馬と弓術が好きで、休みの時に実家に帰ったら、馬に乗ることがある。弓術を学校で体験したことがある。大学に入ったら、弓術の練習をしたい。」（男子、17歳、高中生徒）

生徒に対するインタビューから、興味クラスに参加するかどうかは個々人の考え方や興味によるものであると言える。また、興味クラスは生徒にとって民族文化について理解し、知識を深め、経験できる重要な教育場となっていると言える。

#### 4.4 興味クラスに対する保護者の考え方

親から子どもが学校の興味クラスで勉強することに対する考え方を聞いた。小学校と中学校から保護者1名ずつインタビューに応じてくれたが、どちらも学校が開講する興味クラスに対して賛成している。インタビューの結果は以下の通りである。

「親としては子どもにいろいろな才能を持つ人間になってほしい。子どもは絵画が好きで幼稚園の時から週末の時間を利用して校外の絵画塾に通っていた。絵画塾では学費がかかるし、送迎が大変で、週末の時間が全部埋まってしまって、せっかくの週末を楽しめないことが多かった。小学校に入ってから学校の絵画と毛筆字の興味クラスに入って、経済的に節約できるし、子どもは好きなことを楽しめるし、週末の学習圧力が無くなったから、家族みんなでもっと楽しくなった。」（女性、30代、小学生保護者）

「娘は民族舞踊が好きで、初中2年生から高中2年生まで、学校の民族舞踊の興味クラスで学んでいた。高中3年生になってから、大学進学試験に向けて一生懸命勉強している

ので、興味クラスに行く時間がほとんど取れなくなった。興味クラスは子どもの民族舞踊に対する興味を養成するのにとてもよい場となる。」(男性、40代、初中生徒保護者)

## 5 民族伝統的祝日祭祀文化を活かした民族文化活動

### 5.1 民族伝統のお正月礼儀を活かした入学式

以前、各学校の入学式には民族的特徴はなかったが、幼稚園と小学校は2014年から、中学校は2015年から毎年春学期には民族伝統礼儀を継承し、民族伝統文化を発揚することを主題として民族伝統のお正月礼儀を活かした入学式を行うようになった。入学式に参加する教職員と生徒と保護者は必ず民族伝統衣装を着る。入園式ではオルドス地域のモンゴル民族の伝統のお正月礼儀を再現し、教職員は全員で保護者と生徒を来客として出迎え、招待し、送り出す。調査では幼稚園の教師から民族伝統的習俗を活かした入学式を挙げるようになった背景と目的、入学式に参加した若い保護者から入学式についての考え方を聞いてみた。インタビューの結果は以下の通りである。

「私は子どもの時に、民族伝統的礼儀でお正月を過ごしていた。現代化が進む中、経済的に豊かになって、生活は便利になったが、人々は民族伝統的なものを忘れていることが多い。幼稚園ではモンゴル民族の伝統のお正月礼儀で入園式を行うことで、新年の喜びを感じるとともに若い世代や子どもたちにオルドス地域のモンゴル民族の伝統のお正月礼儀を知って、さらに伝承してもらいたい。」(女性、40代、幼稚園教師)

「私は町生まれで、お正月や祝日に牧区にいる親戚のところへよく行く。入園式に参加してから、自分がこれまでやってきたお正月礼儀が簡単すぎることを自覚した。幼稚園でこうした民族伝統のお正月礼儀を再現することは、私のような民族文化知識が希薄な者や子どもたちが民族伝統習俗を知る良い機会となる。今後、民族の文化習俗について学んでいきたい。」(女性、20代、園児保護者)

インタビューから、現代化が進む中、ウーシン旗の若い世代を中心に民族伝統習俗が希薄になっていることを確認できた。こうした社会現象において、学校で民族伝統的礼儀習俗を再現することは、民族伝統文化を保護し、伝承するのによい機会とも言える。

### 5.2 「チンギス・ハーンの祭祀」儀礼を活かした民族文化活動

調査を行った三か所の学校では、「チンギス・ハーンの祭祀」をテーマにし、民族伝統的祭祀文化について教育活動を行っている。しかし、学校により、「チンギス・ハーンの祭祀」についての教育活動の形式が異なる。つまり、幼稚園と小学校は校内で年に一回定期的に行っている

が、規模は小さく、それぞれの学校用にアレンジされている。中学校では、学校の主催によって生徒代表者は本番の「チンギス・ハーンの祭祀」に参加する場合があるが、活動回数が少なく、毎年行うとは限らない。なお、各学校は「チンギス・ハーンの祭祀」活動を通して、民族伝統的祭祀文化と習俗を児童生徒に知らせ、さらに発展させるという教育目的が一致する。

以下、主に幼稚園と小学校が実施している「チンギス・ハーンの祭祀」儀礼を活かした民族文化活動の現状を概観する。

### 5.2.1 幼稚園の民族文化活動

幼稚園では 2013 年から毎年 6 月に「チンギス・ハーンの祭祀」を活かした祭祀文化活動が行われている。「チンギス・ハーンの祭祀」は園で行う最も重要な民族伝統的祭祀活動である。祭祀行事には教職員と園児と保護者代表が参加し、必ず民族衣装を着る。男性は必ず社会の安定と生活の幸福を祝福する「主の賛歌」であるイジンサンを朗唱し、オボーを祭る。教師は、園児たちに、チンギス・ハーンの偉大な歴史貢献と祭祀の由来を分かりやすく紹介する。すべての園児は行事に実際に参加し、経験する。毎年旧暦の 6 月 21 日にオルドス地域では、「チンギス・ハーンの祭祀」を行うが、園では本番の祭祀よりも前に行うことが多い。祭祀の本番前に子どもたちに教え、本番の祭祀儀礼をもっと詳しく理解し、正確な行動をとるための準備である。

### 5.2.2 小学校の民族文化活動

2009 年から毎年新暦の 4 月 16 日のチンギス・ハーンの誕生記念日を利用し、「チンギス・ハーンの祭祀」が行われている。活動に学校の教師と生徒全員と保護者代表が参加している。また、当旗で有名な民族文化講師を招請し、祭祀を指導してもらっている。4 月 16 日の午前はいジンサンを朗誦し、参拝者みんなでイジンサンを祭る。その後、保護者代表が生徒に民族文化習俗の授業を行う。午後はモンゴル語の読書活動を行う。「チンギス・ハーンの祭祀」では、講師はいジンサンを祭る原因と祭り方を説明し、イジンサンを祭る。その中で、少数の男子生徒は講師の指導通りにイジンサンを祭り、実際に祭祀文化を体験する。また、民族習俗文化の授業の内容は班ごとにそれぞれ違うが、内容を各班の担任教師が計画する。担任教師は生徒の保護者や民族文化に詳しい年配者と連絡をとり、テーマを決めて活動当日学校に来て生徒に教えてもらうように依頼する。活動当日、保護者代表は教室内で民族文化習俗を教え、生徒は実際に体験する。

調査では、各学校の民族伝統的祭祀文化活動を計画し、実施することにかかわった教師から、民族文化活動の内容設定、動機、経緯について詳しく聞いた。インタビューの内容は以下の通りである。

「国家の民族教育政策では、民族教育を優先的に発展させることと生徒に国家課程を充

分教えたうえに、地方の優秀な伝統文化を発展させて、教育するように提唱している。学校はこうした、教育政策方針に従って地方の特色文化の実情に合わせて、実際の活動内容を設定するようにしている。オルドス地域は、現在まで「チンギス・ハーンの祭祀」文化は豊富に残されている典型的な地域である。でも、子どもたちは就学のために、学校の寮に住み込んで、牧畜生活との接触が減少し、さらに「チンギス・ハーンの祭祀」に参加できる機会がとても少ない。子どもたちに民族の伝統的で、優秀な文化習俗を伝承してもらうため、「チンギス・ハーンの祭祀」を主題として民族祭祀文化を教えている。毎年、祭祀儀礼が変わらないが、それに伴って行う民族文化習俗の授業は民族伝統的衣食住文化をめぐって、内容は様々である。現在の社会現状からみれば子どもたちに民族文化習俗を教えることが急務となっている。」(女性、50代、小学校教師)

また、学校で子どもたちにチャガンイデゲの作り方、馬の文化及び頭絡の作り方を教えた保護者にインタビューした。インタビューでは、保護者から自分たちが育てられた時代に比べて現在の子どもの生活環境、教育環境、伝統文化を受ける環境の変化、学校で教えた民族文化の内容、目的、経緯について語ってもらった。

「私は小学校3年の勉強も中途半端だった。小さい頃から牧区で生活して、民族伝統衣装をほとんど毎日着ていたし、肉とミルクティーとモンゴル・アムを主食としていた。日常生活において親が民族伝統習俗などについて教えてくれた。子どもの時は親に家事と家畜の世話を良く手伝っていたので民族伝統習俗、日常生活知識などを身に付けることはとても自然な行動だった。私の世代と比べると、現在の若者さらに子どもは民族習俗文化知識が乏しい。現在の親は子どもを可愛がって、家事と家畜の世話をほとんどしてもらわない。子どもは休みの時に家でテレビを見たり、インターネットをしたり、好きなことをやることが多い。現在、子どもを学校に行かせるのは当たり前のこととなり、しかも教育環境と教育の質が良い町の学校へ行かせる。私は3年前から、町の家に住んで孫2人の世話をして週末牧区の家に戻る。普段孫たちには民族習俗をよく教えて、みんなチャガンイデゲをよく食べる。でも、今の子どもは町と牧区を問わずチャガンイデゲの作り方をほとんどわからなくなっている。チャガンイデゲについて子どもたちにわかってもらうために、孫が通っている班にチャガンイデゲの作り方を教えた。」(女性、50代、保護者)

「1990年代前期まで、馬は重要な交通手段となっていた。放牧の時や親戚訪問、町に行くときなどには、馬は欠かせない時代であった。1990年代後半から、五畜の中でラクダが観光地で1、2頭見られる。羊とヤギと牛を飼っている人は多い。牧民は興味で少数の馬を飼って、日常生活では馬を使わない。馬がいなくなることに伴い、馬文化いわゆる馬の品種、馬

具、色模様についての知識が失われている。今回の活動では子どもたちに馬の品種、馬具、模様などに詳しく説明したほかに、綱を使って頭絡の作り方を教えた。これらを教えることを通して、馬文化を紹介し、馬文化を知ってもらいたい。」（男性、50代、保護者）

インタビューから、保護者らは牧区に生まれ育ち、子供の頃から日常的に民族伝統文化と接し、経験する機会が非常に多かったことがわかる。親世代から民族伝統文化習俗についてよく教わり、現在次世代にも積極的に民族文化習俗を教えている。しかし、現在の牧区生活環境、子どもの就学環境の変化により、子どもたちは民族伝統文化と触れ合う機会が減少し、民族文化知識が希薄になっている社会現状が反映された。こうした社会現状において、学校で民族の歴史及び文化習俗を教えることは、生徒たちにとって民族伝統的祭祀・歴史・文化習俗を体験し、知り、実感できる良い機会となる。

## 6 それ以外の民族文化活動

### 6.1 社会実践による民族文化体験

中学校には生徒が夏休みと冬休み期間中に参加した民族文化活動について写真を撮ったり、録画したり、記録する宿題がある。幼稚園では2015年から毎年3、4回社会実践活動を行っている。社会実践活動は学校課程教材の内容と緊密に関連し、学校課程教材の内容を社会実践活動で体験する。活動の準備と指導、場所などを配慮し、班ごとに行うことが多いが、学年ごとで行う場合もある。2017年から、社会実践にかかる費用を当地旗政府が補助するようになったが、それまでは保護者が費用を負担していた。この活動は当旗政府、幼稚園、牧民、保護者、地域の図書館及び博物館、自然科学館などの協力によって計画され、実施されるものである。

社会実践活動は主に、農作物の耕作及び収穫、牧民の家でモンゴル民族伝統習慣、フフル（かぎたばこの瓶）とハダグ<sup>5)</sup>の交換方法、招待礼儀、客の送迎礼儀、親戚付き合い方法及び親戚回り方、敬老愛幼教育などを体験する。またモンゴル・ゲル（パオ）の建て方、家畜を世話する方法、毛刈り、牛乳を搾る、ミルクティーの作り方、乳製品を作る、伝統的食べ物を作るなどをする。郊外や草原に行って植物、昆虫を見たり、季節の変化を見たりする。また、食べられる植物をとり、手作り料理を作ったりする。郊外で安代舞を踊ったり、民歌を歌ったり、プフをとる。博物館で動植物の模型及び生態状況を観察し、図書館で職員がモンゴル民族の歴史と有名な著作を紹介し、解説する。

### 6.2 ラジオ体操と民族伝統的運動会

小学校と中学校では、民族文化を保護し、伝承する目的でラジオ体操の時間を利用し、定期的に民族舞踊を踊ることと陸上運動会に民族伝統的体育と芸術項目を設け、民族伝統的運動会を開くようにしている。

小学校では2012年からラジオ体操時間を利用し、毎週火曜日は筷子舞を踊り、木曜日には安代舞を踊る。中学校では、2016年から毎週火、木曜日に安代舞を、2018年からモンゴル馬舞踊を踊るようになった。ラジオ体操の時間に民族舞踊を踊る時に生徒と教師は必ず民族伝統衣装を着ている。

小学校は2014年から陸上競技運動会を民族伝統的体育芸術運動会と名付け、従来の陸上競技項目にモンゴル民族歌、モンゴル民族舞踊、モンゴル将棋、蹴羽根（けばね）、シャガー、ビラグ、ブフ、弓術といった8つの民族伝統的体育芸術にかかわる競技項目を加えた。2017年の運動会には「第1回弓術競技大会」を行い、当旗弓術協会の会員を招いて生徒と教師に弓術の技能について指導と評価をしてもらった。教職員と生徒全員で男女を問わず弓術を経験し、弓術技能を初歩的に把握することができた。中学校では陸上競技運動会と民族伝統的運動会を別々に行っている。2018年11月に初めて弓術とブフ大会を開催し、教師の話によると今後も行いう予定であるという。小学校と比べて中学校の方が陸上運動会を利用して民族伝統的体育芸術を競技するようになった時期が遅く、項目が少ない。

調査では、各学校の体育の教師1名ずつから音楽、美術と体育を含む民族文化を伝承する課程の実施状況の変化、学校で民族伝統的運動会を行う必要性を聞いた。二人とも民族伝統的運動会を行うことは生徒たちが民族文化を理解し、伝承していくのに必要だと主張する。聞き取りをした2名の教師のうち1名は次のように話していた。

「素質教育の実施は、学校教育を通じて、生徒に対して徳育、知育、音楽、体育、美育といった多方面の教育を強化して、全面的発達を目指している。2014年まで音楽、美術、体育の授業時間が他の課程に回されることも少なくなく、担当教師は一人ずつしかいなかった。最近、これらの授業は授業時数通りに行うようになった。民族伝統的運動会は生徒たちが民族芸術と体育のすばらしさを実感して、接する機会となる。国家民族教育政策に合わせて、学校では地域の民族特色を発揮して、生徒たちに民族文化教育を行うことが民族文化の維持と発展につながると思う。」(50代、男性、初中教師)

既述のように、各学校では地方文化及び民族文化を中心内容とする学校課程の教材が作成され、その教材を使って幼稚園と小学校において教えられている。また、興味クラスを設置して民族伝統的芸術と体育を教えている。それに、民族伝統のお正月礼儀と「チンギス・ハーンの祭祀」儀礼を活かした民族文化活動を行っている。小学校と中学校ではラジオ体操の時間を利用して定期的に民族舞踊を踊るとともに、民族伝統的運動会を開催している。学校によって民族文化教育の活動内容は若干異なるが、それぞれ独自の取り組みであり、生徒に民族文化を伝承するのにとても有意義な教学活動であると言える。要するに、それぞれの学校は学校課程、興味クラス、民族文化活動において自発的かつ積極的に地方及び民族の伝統文化を取り入れて

いる。こうして各学校は、生徒が民族文化を理解し、体験し、触れ合いできる良い機会を作り上げている。

## 結論

本稿では、ウーシン旗のモンゴル民族の幼稚園、小学校、初中、高中における学校課程の開発及び教育状況、課外活動とそれ以外の民族文化活動をめぐる民族文化教育にかかわる様々な取り組みを分析してきた。各学校の民族文化教育にかかわる活動内容を分析することを通じて、以下のことが明らかになった。筆者が李叶（2018）により明らかにしたフレー旗の学校と比べ、ウーシン旗の学校では児童生徒に対し、民族文化を伝承することについて以下の3点で成果を挙げている。

1 学校課程においては、教師が指導力を十分発揮し、地域と民族の歴史及び文化習俗についての知識を取り入れた学校課程の教材を開発している。さらに、幼稚園と小学校は学校課程を開講し、民族文化習俗を教えている。これらの教材は生徒にとって地域及び民族の歴史及び文化習俗を学習するうえで欠かせない貴重な教学資料となっている。

2 興味クラスは各学校の管理のもとで民族の伝統的芸術と体育についての内容を幅広く設置し、計画的に授業を行っている。興味クラスの授業は、生徒にとって民族文化についての興味を引き起こし、民族文化を理解し、経験できる重要な教育場となっている。

3 学校と地域と保護者は協力し合い、地域の文化資源を効率的に活用し、多彩多様な民族文化活動を行っている。当地域の学校で行われている各種の民族文化教育活動から、地域文化及び民族文化を保護し、次世代に民族文化を伝承する強い意志と行動が看取られた。

総じて、素質教育と新課程改革と民族文化採用政策の影響を受け、ウーシン旗のモンゴル民族学校では民族伝統文化を保護し、伝承するために、さまざまな視点から積極的に民族文化教育を盛んに行うようになっている。地方政府、保護者と民族学校の協力のもとで、牧区特有の民族文化の優れたところを活かし、学校教育を通してモンゴル民族文化を次世代に伝承しようとする様子がうかがえた。それらの取り組みは民族文化を失いつつある時代において、モンゴル民族文化の保護、維持、伝承、復興にとって示唆的なモデルとなり得ると言える。しかし、学校課程を実施するうえで学校それぞれの問題が起きている。幼稚園と小学校では学校課程を開講しているが、課程を担当する教師の民族文化知識のレベルが低く、民族文化習俗についてうまく教えられないことを指摘できる。中学校では国家課程を重視することを余儀なくされ、学校課程を開講できない状態である。各学校では民族文化教育を徹底的に実施するために、学校課程の授業時数を確保し、教師の民族文化知識のレベルを高め、民族文化教育に必要な人材を養成することが課題となっている。



## <注>

- 1) オボー (Oboo) は、モンゴル民族の信仰による祭壇であり、高い丘の頂上に築かれることが多い。人々はオボーに石を投げ、右に回りながら祈りを捧げる。オボーは古くから木の枝などで作られていたが、現在では石を積んだものが一般的である。
- 2) ウーシン旗の政府公式サイト [www.wsq.gov.cn](http://www.wsq.gov.cn) を参照した。2019年8月20日最終アクセス。
- 3) スウルデ (Sulde) とは、人間の魂、超自然的な威力が宿る神器、守護神である。モンゴル帝国時代の国旗である。モンゴルには古くから三種類のスウルデがあり、いずれもオルドス・モンゴルによって維持されてきた。
- 4) シャガー (Shaag) 遊びとは、羊の後ろ足のくるぶしの骨であるシャガーを玩具とする子どもの遊びの一種である。
- 5) ハダグ (Hadag) とは、チベット族やモンゴル族が祝贺や尊敬の印として相手に贈る白色・黄色・藍色などの帯状の絹布である。

## <参考文献>

### <日本語文献>

- アルタンホアール (2016) 「内モンゴル自治区東部フレー旗におけるモンゴル語の現状:言語生活の社会的背景」『生活機構研究科紀要』昭和女子大学 Vol.25,pp.99-112.
- (2017) 「地域の「危機言語」としてのモンゴル語:内モンゴル自治区フレー旗樹林子におけるモンゴル語の使用状況」『生活機構研究科紀要』昭和女子大学 Vol.26, pp.23-41.
- イリチ (2012) 「チャハル方言における漢語図その接触現象とその地域差—シリン浩特市とグンボラガ・ソムの比較から—」『ユーラシア言語文化論集』千葉大学 No.14,pp.97-104.
- 鳥力更 (2013) 「中国モンゴル民族学校教育とアイデンティティに関する研究」『大学院紀要』仏教大学 Vol.41,pp.1-17.
- 崔淑芬 (2011) 「内モンゴル自治区の教育現状の一考察」『筑紫女学園大学短期大学部紀要』筑紫女学園大学 Vol.6,pp.155-166.
- 賽漢花 (2017) 「民族統合政策による民族教育の変容:中国内モンゴル自治区赤峰市を中心に」『日本モンゴル学会紀要』日本モンゴル学会 No.47, pp.33-46.
- スチングワ (2007) 「教育内容から見る中国少数民族教育:モンゴル民族学校における教科書分析を中心に」『日本教育社会学会大会発表要旨論集』日本教育社会学会 No.59, pp.81-82.
- 哈申格日勒・小柳正司 (2007) 「中国内モンゴル自治区における民族語教育の現状」『教育実践研究紀要』鹿児島大学教育学部 Vol.17, pp.101-107.
- ハスパートル (2010) 「中国教育における内モンゴルの民族の位置づけ」『神戸市外国語大学研究科論集』神戸市外国語大学 Vol.13, pp.103-131.
- 哈斯額尔敦 (2005) 「中国少数民族地域の民族教育政策と民族教育の問題—内モンゴル自治区の民族教育を中心に」『多元文化』名古屋大学 Vol.5, pp.265-280.
- ハスゲレル (2004) 「中国におけるモンゴル民族教育の国語教科書に関する研究:歴史・文化の内容」『上越

内モンゴルの学校における民族文化教育についての考察（李叶）

社会研究』上越教育大学 Vol.19,pp.101-110.

———（2005）「中国におけるモンゴル民族教育の構造と課題—教科書分析を中心に」『国際教育』日本国際教育学会 Vol.11,pp.43-62.

ハスバガン（2000）「清朝時代のモンゴル民族教育と言語教育」『東京大学大学院教育学研究科紀要』東京大学 Vol.40,pp.89-116.

ブヘ（2015）「内モンゴルホルチン方言の借用語について—漢語を中心に—」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』東京外国語大学 No.11,pp.157-164.

ボルジギン・モンホバト（2013）「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族学校の実態：モンゴル人学生の言語使用に関するアンケート調査から」『人文社会科学研究』千葉大学 No.27,pp.205-213.

———（2014）「内モンゴル自治区におけるモンゴル文字の使用について：その使用事例と法律規定からの一考察」『人文社会科学研究』千葉大学 No.28, pp.237-247.

———（2015）「内モンゴルにおける言語使用の実態：モンゴル人学生の言語使用に関するアンケート調査から」『人文社会科学研究』千葉大学 No.31,pp.144-153.

李叶（2018）「学校における民族伝統文化教育についての考察—内モンゴル通遼市庫倫旗のモンゴル民族学校を事例に—」『現代社会文化研究』新潟大学 No.67, pp.1-17.

麗麗（2018）「中国農村部の子どもへの学校統廃合の影響—内モンゴル自治区寄宿制学校調査を手がかりにして—」『福祉社会開設研究』東洋大学 Vol.10, pp.73-82.

### <中国語文献>

阿拉塔（2016）「民族文化在民族学校的传承研究—以内蒙古阿拉善地域小学为例（民族学校における民族文化の传承研究—内蒙古阿拉善地域の小学校を事例に）」『赤峰学院学报（漢文哲学社会科学版）』赤峰学院 Vol.37,No.8,pp.232-233.

崔劍・鮑曉艷・汪海玲（2012）「教育改革背景下蒙古族文化传承的困境与对策（教育改革における蒙古族文化传承の難点及び対策）」『内蒙古農業大学学报（社会科学版）』内蒙古農業大学 Vol.14,No.6,pp.93-95.

関健・張艷華（2016）「関与民族学校民族文化传承现状的调查研究—以赤峰市蒙古族学校为个案（民族学校における民族文化の传承现状に関する调查研究—赤峰市蒙古族学校を事例に）」『長江叢刊・理論研究』湖北省作家協会 No.35,pp.54-55.

韓天嬌（2017）「蒙古族传统文化学校课程实施现象研究—通遼市 K 学校为例—（蒙古族传承文化学校课程的实施现象についての研究—通遼市 K 学校を事例に—）」東北師範大学修士学位論文.

金海・齊木徳道爾吉・胡日晝・哈斯巴根編（2009）『清代蒙古志』内蒙古人民出版社.

劉偉・李洪梅（2016）「内蒙古民族文化的传承与保護（内蒙古民族文化の传承及び保護）」『内蒙古師範大学学报（漢文哲学社会科学版）』内蒙古師範大学 Vol.45,No.2, pp.103-107.

主指導教員（杉原名穂子准教授）、副指導教員（渡邊登教授・広川佐保准教授）